

# 児童期における内的作業モデルの検討Ⅲ

— 親に対する認知像との関連について —

A discussion of Internal Working Model in preadolescence Ⅲ.

— In relation to cognition about parents —

井手裕子

Yuko IDE

## I. 問題

Bowlby (1969) が提唱した愛着システムは、乳児と愛着対象との間に形成される情緒的絆である。これは、乳児が生後数ヶ月間から1年の間に形成され、新たな関係性のなかで情緒的な経験を重ねることによって変化していくとされている。

彼は、乳児に対する母親の応答性が、子どもにとってどれだけ安全感を得られるかという認知的な有効性を規定するとした。そして、この規定は日常的に繰り返される母親との関わりの中で子どもの心に内在化され内的表象を形成し、時間とともに安定しながら生涯の対人方略を形作るとした。そしてこれを内的作業モデル (Internal Working Model: 以下 IWM と記す) と名づけた (Bowlby, 1969, 1973, 1980)。

このようなメカニズムの IWM を手がかりとして、子どもと愛着対象者 (母親) の関係性を予測する研究 (Ainsworth et al, 1978: 遠藤, 1992a, 1992b: 久保田, 1997: 宮本, 1997: 遠藤ら, 1998) が数多くなされてきたなかで、これまで筆者は児童期における IWM について、発達の検討 (井手, 2004) と、親和性との関連 (井手, 2007) について

検討を行ってきた。

井手 (2004) では、IWM の 3 因子得点と母子関係を検討した結果、男女で異なる発達の特徴が示され、5 年生女子の「ambivalent」得点と 4 年生女子の「secure」得点に交互作用が有意であった。また、母子関係得点からは青年期と同様の対人方略の特徴が認められた。

井手 (2007) では、仲間構築が活性化される児童期における IWM の個人特性と親和動機との関連性を検討した結果、「ambivalent」得点は「分離不安」と正の相関、「secure」得点はすべての親和動機と正の相関、「avoidant」得点は「分離不安」を除くすべての親和動機と負の相関を示し、対人方略としての IWM が親和動機にも反映されていることが示された。

このように、児童期においては、IWM は部分的には安定しつつあるとはいえるが、発達の要素を含みながら、確立の途上であると考えられた。そのことをふまえ、本研究では、子どもが実際の生活場面において母親へ語りかけた場合にどのような反応を予測するかという絵画 (CCP) を用いて、子どもから見た親の認知像について検討したい。

## II. 目的

児童期の IWM と、親に対する認知像との関連性を検討する。特に、発達的な特徴を踏まえながら、IWM のそれぞれの3つの因子に高得点を示した者を群分けした純型3群が、投影法 (CCP) においてどのような特徴を示すかを検討し、児童期の IWM の構成要素を明らかにすることを目的とする。

## III. 方法

### 1. 対象

対象は、A 県等の小学生 (3 ~ 6 年生) 727 名 (男子352名, 女子375名) である (表1)。

表1 アンケート回答人数 ( )内はCCP尺度有効人数

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
男子	68(66)	78(70)	110(104)	96(94)	352(334)
女子	100(97)	72(69)	91(89)	112(110)	375(365)
計	168	150	201	208	727(699)

### 2. 質問紙

質問紙は、以下の IWM 児童用尺度 (宮本, 1997) と、CCP (林ら, 1987) を用いた。

1) IWM 児童用尺度: 詫摩ら (1988) により作成された18項目を、宮本 (1997) が児童用に修正したものである。例えば、詫摩ら (1988) の「私はわりあいたやすく人と親しくなる方だと思う。」という質問項目は、「知らない子ともすぐに仲よくなれま

す。」というように、児童にとってわかりやすいような簡単な言い回しになっている。

### 2) CCP (A TEST FOR MEASURING CHILDREN'S COGNITION OF PARENTS)

: 12の生活場面の絵をもとに、あらかじめ書かれた子どものセリフに対する親の返答を、思いついた親との会話を予測して書かせるものである。12の場面は、救助, 親和, 独立の3種類の前景欲求に分かれており (表2), 特に救助場面では、子どもの安全感が脅かされ、それによって Bowlby の示した愛着システムが活性化される状況を示すといえる。その時に子どもが反応した母親の言葉は、日常的なやりとりと、それを内在化した子どもの認知的な予測の反映であり、子どもの IWM が CCP に反映する可能性が高いと考えられる。本調査では、例えば子どもが「きぶんがわるいのです」と訴えたときに、子ども自身が最初に思い浮かんだ母親の返答を書くよう教示した。

### 3. 実施時期

1998年6月から7月に、小学校の了解を得て、各教室で授業時間内に担任教師が配布し、無記名により集団実施した。実施時間は約40分であった。実施後は各自で封をし、回収した。

表2 CCP各場面の欲求体系

番号	欲求場面	場面	背景の欲求	前景の欲求	行動様式
1	救助	きぶんがわるいのです	有害回避	救助	うったえ
2	親和	いっしょにあそんで	遊戯	親和	親和的接触
3	独立	ひとりでするよ	自律 (成就・承認)	不可侵	独立の主張
4	救助	勉強おしえてちょうだい	屈辱回避, 非難回避, 理解	救助	依存
5	親和	ちょっときてごらん	説明 (示説)	親和 (含支配)	誘致
6	独立	みないでよ	把持	不可侵	自律の主張
7	救助	ほんかってちょうだい	理解, 遊戯	救助	依頼
8	親和	こんなえかいてきた	自己顕示	承認 (含親和)	見せびらかし
9	独立	おつかいにいくのめんどくさいなあ	自律 (引込み・屈辱回避)	自律	抵抗
10	救助	きょうのテストあまりできなかった	屈辱回避	救助 (屈服)	うったえ
11	親和	てつだわして	自己顕示, 親和	養育 (含親和)	援助
12	独立	あそんでくるよ	遊戯	自律	自由

4. 分析

1) I WM児童用尺度

(1) 因子分析

I WM児童用尺度については先行研究に準拠し、「はい」、「わからない」、「いえ」の3件法で回答を求め、3、2、1点を与えて得点化した。分析方法は、宮本（1997）を準拠し、バリマックス回転を行った。さらに非線型主成分分析で因子分析を行い、構成要素がバリマックス回転によるそれと大方同様であったため、そのまま点数化を行った。最終的に、寄与率は23.6%と低いものの、3因子が抽出され「ambivalent」、「secure」、「avoidant」と命名した。なお分析の詳細については、井手（2004）に報告済みである。

(2) 群分け

上記の因子分析で命名された3因子の、それぞれの因子得点の平均値を「ambivalent」得点、「secure」得点、「avoidant」得点とし、各得点が75%値以上で、他2つの得点が25%値未満の者を抽出し、以下のように群分けして命名した。

「純両価群」は「ambivalent」得点が

75%値以上で、「secure」得点「avoidant」得点が25%値未満の者とした。「純安定群」は「secure」得点が75%値以上で、「ambivalent」得点「avoidant」得点が25%値未満の者とした。「純拒否群」は「avoidant」得点が75%値以上で、「ambivalent」得点「secure」得点が25%値未満の者とした。

(3) 群ごとの人数偏り

(2)で群分けした3群に、上記3群に属さない「不定型群」を加え、全体、学年（高学年、低学年）、性別（男子、女子）について $\chi^2$ 検定を行い、人数の偏りを検討した。

2) C C P（親に対する子どもの認知像の検査法）

(1) 評定

C C Pに記述された各反応語について、林ら（1987）に準じC C P評定因子（表3）分析を発達心理学系大学院生2名で行い、評定した。一致率は98.8%であった。

(2) 評定値の人数偏り

(1)で評定したそれぞれの評定値の度数

表3 C C P評定因子の定義

欲求の受容・拒否	評定記号	定義（子どもの認知）	内容	註
受容ΣA	c	瞬間的には不満をひきおこさない程度に統制を加えて欲求を受け入れ、情緒的にも受容している	鼓舞・激励条件つき受容	Control（統制）
	c'	欲求に対して一応の関心を示すが、ただちに具体的には欲求を満たさない。	一応の関心	
	s	なんら統制を加えず、欲求をそのまま受け入れ、情緒的にも受容している。	服従・盲従	Submission（服従）
拒否ΣR	d	欲求を受け入れず、思い通りに強力に働きかけるが、情緒的には拒否しない。	厳格、いい訳・弁明、支配、(物で)つる、反省を求める	Dominance（支配）
	d'	ただちに欲求を満たさず、都合のよいように支配して欲求の充足を遅延させている。	欲求充足の遅延	
	r	欲求を受け入れず、情緒的にも拒否したり、非難、嘲笑、攻撃したりする。	嘲笑、非難、つっぱね、冷淡	Rejection（拒否）
	i	欲求に無関心で欲求を満たさず放置する。	無関心、無言、うけながし、すりかえ	Indifference（無関心）
	i'	欲求をみださず、言い逃れたり、責任を回避したり、他者へ転嫁したりする。	言い逃れ、他者への転嫁	

に対応する人数の偏りを検討するため、全体、学年、性別、性別学年で $x^2$ 検定を行った。

(3) 純3群と欲求体系別場面での評定因子度数の人数偏り

林ら(1987)に準じ欲求体系ごとの「救助」「親和」「独立」の3場面に分類した(表2)評定値の度数に対応する人数の偏りを検討するため、 $x^2$ 検定を行った。「救助」場面は場面1, 4, 7, 10, 「親和」場面は場面2, 5, 8, 11であり、「独立」場面は、場面3, 6, 9, 12が含まれる。

(4) 稀有反応の人数偏り

評定値の反応が発達年齢に応じた通常反応であるか、稀有な反応であるかを検討するため、林ら(1987)に準じ、通常反応、稀有反応とその他の反応に分類した(表4)人数の偏りを検討するため、純型3群全体で $x^2$ 検定をおこなった。また、欲求体系の3場面(「救助」「親和」

「独立」)ごとの合計人数の偏りを検討するため、欲求体系場面ごとに $x^2$ 検定を行った。さらに各場面ごとの学年、性別、性別学年ごとの $x^2$ 検定を行った。

IV. 結果

以下の結果で示された人数分布は、0や5以下の数値が多く、本来は $x^2$ 検定が適切でない恐れがあった。そのことをふまえ、傾向を捉えるため $x^2$ 検定を試行し、参考にした。

1. IWM群分けによる人数偏りについて

IWM因子得点によって群分けされた「純両価群」、「純安定群」、「純拒否群」に、その他の「不定型群」を加えた人数分布を見ると、純型3群全体の比率は不定型群の10%前後であった。また、純両価群の女子が多く、純拒否群は男子のみで女子は存在しなかった。

人数の偏りを検討するため $x^2$ 検定した結果、全体( $x^2(3)=1534.24, p<.01$ )、高学年と低学年( $x^2(3)=8.68, p<.05$ )、男子と女子

表4 場面ごとの反応種類

	反応/性	場面1		場面4		場面7		場面10	
		男	女	男	女	男	女	男	女
救助 場面	低学年	d	d	d	d	d	d	d・c	d・c
	通常	r・i	r・i	r・i	r・i	i	i	i・s	i・s
	稀有	c・s	c・s	c・s	c・s	c・s・r	c・s・r	r	r
	その他	-----		-----		-----		-----	
	高学年	d	d	d	d・c	d・c	d・c	d・c	d・c
	通常	r・i	r・i	r・i	r	i	i・s	i・s	i・s
稀有	c・s	c・s	c・s	c・s	s・r	r	r	r	
その他	-----		-----		-----		-----		
	反応/性	場面2		場面5		場面8		場面11	
		男	女	男	女	男	女	男	女
親和 場面	低学年	d	d	c	c	s	s	s	s
	通常	c・s	r・c・s	r・i	r・i	r・i	r・i	i・c	r・i・c
	稀有	r・i	i	s・d	s・d	c・d	c・d	d・r	d
	その他	-----		-----		-----		-----	
	高学年	d	d	c	c	c・s	c・s	s・d	s
	通常	c・s	r・c・s	r・i・s	r・i・s	r・i	r・i	i	r・i
稀有	r・i	i	d	d	d	d	c・r	c・d	
その他	-----		-----		-----		-----		
	反応/性	場面3		場面6		場面9		場面12	
		男	女	男	女	男	女	男	女
独立 場面	低学年	s	s	c・s	c・s	d	d	c	c
	通常	r・i	r・i	r・i	r・i	i・c	i・c	d・r・i	d・r・i
	稀有	c・d	c・d	d	d	s・r	s・r	s	s
	その他	-----		-----		-----		-----	
	高学年	s	s	c・s	c	d	d	c	c
	通常	r	r	r・i	r・i	i・c	i・c	d・r・i	d・r・i
稀有	c・d・i	c・d・i	d	s・d	s・r	s・r	s	s	
その他	-----		-----		-----		-----		

児童期における内的作業モデルの検討Ⅲ（井手 裕子）

( $\chi^2(3)=19.48, p<.01$ )で有意な差が示された。その後の残差分析の結果、純両価群が高学年(15名)は低学年(2名)に比して有意に多かった。また、純両価群は、女子(14名)が男子(3名)に比して有意に多く、純拒否群は男子(12名)が女子(0名)に比して有意に多かった。学年差と性差が有意であったため、それぞれ $\chi^2$ 検定した結果、低学年( $\chi^2(3)=13.99, p<.01$ )は純安定群が女子で有

意に多く、純拒否群が男子で有意に多かった。高学年( $\chi^2(3)=11.27, p<.05$ )は純両価群が女子で有意に多く、純拒否群は男子で有意に多いという結果で、男子と女子に有意な人数の偏りが認められた。また男子で純安定群について低学年に比して高学年が有意に多いという人数偏りが示された( $\chi^2(3)=7.88, p<.05$ )。これらを表5に示した。

表5 群分けによる人数内訳とカイニ乗検定による有意差 人(%)

		純両価群	純安定群	純拒否群	不定型群	合計	$\chi^2$
全体		実際度数 17(2)	47(7)	12(2)	622(89)	698(100)	$\chi^2(3)=1534.24, p<.01$
		調整残差 -157.5	-127.5	-162.5	447.5		
ライマンの定義水準を用いた多重比較		純両価群<純安定群 *		純安定群>純拒否群 *			
		純両価群=純拒否群 ns		純安定群<不定型群 *			
		純両価群<不定型群 *		純拒否群>不定型群 *			
学年	低学年	実際度数 2(.7)▽	18(6)	7(2.3)	275(91)	302(100)	$\chi^2(3)=8.68, p<.05$
		調整残差 -2.65**	-0.71	1.06	1.44		
	高学年	実際度数 15(3.8)▲	29(7.3)	5(1.3)	347(87.6)	396(100)	
		調整残差 2.65**	0.71	-1.06	0.09		
	合計	17	47	12	622	698	
性別	男子	実際度数 3(.9)▽	21(6.3)	12(3.6)▲	298(89.2)	334(100)	$\chi^2(3)=19.48, p<.01$
		調整残差 -2.52*	-0.45	3.65**	-1.41		
	女子	実際度数 14(3.8)▲	26(7.1)	0(0)▽	324(89)	364(100)	
		調整残差 2.52*	0.45	-3.65**	-0.09		
	合計	17	47	12	622	698	
低学年	低学年男子	実際度数 0(0)	4(1.3)▽	7(2.3)▲	125(41.4)	136(100)	$\chi^2(3)=13.99, p<.01$
		調整残差 -1.28	-2.01*	2.96**	0.47		
	低学年女子	実際度数 2(.7)	14(4.6)▲	0(0)▽	150(49.7)	166(100)	
		調整残差 1.28	2.01*	-2.96**	-0.47		
	合計	2	18	7	275	302	
高学年	高学年男子	実際度数 3(.8)▽	17(4.3)	5(1.3)▲	173(87.4)	198(100)	$\chi^2(3)=11.27, p<.05$
		調整残差 -2.37*	0.96	2.25*	-0.15		
	高学年女子	実際度数 12(3.0)▲	12(3.0)	0(0)▽	174(43.9)	198(100)	
		調整残差 2.37*	-0.96	-2.25*	0.15		
	合計	15	29	5	347	396	
男子	低学年	実際度数 0(0)	4(3)▽	7(5.1)	125(91.9)	136(100)	$\chi^2(3)=7.88, p<.05$
		調整残差 -1.44	-2.09*	1.27	1.31		
	高学年	実際度数 3(1.5)	17(8.6)▲	5(2.5)	173(87.4)	198(100)	
		調整残差 1.44	2.09*	-1.27	-1.31		
	合計	3	21	22	298	334	
女子	低学年	実際度数 2(1.2)	14(8.4)	0(0)	150(90.4)	166(100)	
		調整残差 -	-	-	-		
	高学年	実際度数 12(6.1)	12(6.1)	0(0)	174(87.9)	198(100)	ns
		調整残差 -	-	-	-		
	合計	14	26	0	324	364	

▲有意に多い▽有意に少ない / † p.<.10 \*p.<.05 \*\*p.<.01

2. C C P 評定度数の人数偏り

3群におけるC C P 評定値の人数偏りを検討するため、 $\chi^2$  検定を行った。

3群全体の人数の偏りには有意な差が認められなかったため、高学年と低学年、性別、性別学年ごとの検定を行ったところ、以下の結果が得られた。

評定 d においては、低学年で有意な偏りが示され ( $\chi^2(8)=18.82, p<.05$ )、さらに低学年男子 ( $\chi^2(3)=6.68, .10<p<.05$ ) と、低学年女子 ( $\chi^2(4)=9.91, p<.05$ ) で人数の偏りが認められた。その後の残差分析の結果、低学年では評定因子度数 0 で純両価群が有意に多かった。低学年男子は評定因子度数 4 において純安定群が有意に多く、純拒否群が有意に少ないことが示された。低学年女子は評定因子度数 0 において純両価群が有意に多く、純安定群が有意に少ないことが示された。

評定 r は、女子において人数の偏りが有意な傾向であることが認められた ( $\chi^2(3)=7.36, .10<p<.05$ )。その後の残差分析で評定度数 2 において純両価群が有意に多く、純安定群

が有意に少ないことが示された。

評定 i は、高学年 ( $\chi^2(6)=15.61, p<.05$ ) と男子 ( $\chi^2(6)=12.81, p<.05$ ) において人数の偏りが有意で、特に高学年男子 ( $\chi^2(6)=17.09, p<.05$ ) において人数の偏りが有意であった。その後の残差分析の結果、評定度数 0 において純安定群、評定度数 2 において純両価群、評定度数 3 において純拒否群が有意に多いことが示された。これらの結果を表 6 に示した。

3. 欲求体系別場面での評定因子度数の人数偏り

欲求体系ごとの3場面の人数偏りを検討するため、 $\chi^2$  検定を行った。3群全体では、救助  $\Sigma$  拒否 ( $\chi^2(8)=15.59, p<.05$ )、独立  $\Sigma$  拒否 ( $\chi^2(8)=15.74, p<.05$ ) で有意な人数偏りが認められた。人数偏りに関して有意な傾向を示したのは、救助 c ( $\chi^2(8)=14.94, .10<p<.05$ )、救助  $\Sigma$  受容 ( $\chi^2(8)=15.29, .10<p<.05$ )、親和 c ( $\chi^2(6)=10.72, .10<p<.05$ )、親和 i ( $\chi^2(2)=4.67, .10<p<.05$ )、

表 6 C C P 評定度数の  $\chi^2$  検定

			0	1	2	3	4	
d (低学年男子)	純安定群	実際度数	—	2	0	0	2▲	$\chi^2(3)=6.68, .05<p<.10$
		調整残差		0.71	-1.53	-1.18	2.07*	
	純拒否群	実際度数	—	2	3	2	0▽	
		調整残差		-0.71	1.53	1.18	-2.07*	
d (低学年女子)	純両価群	実際度数	1▲	0	0	1	0	$\chi^2(4)=9.91, p<.05$
		調整残差	2.73**	-1.33	-0.87	1.21	-0.39	
	純安定群	実際度数	0▽	7	4	2	1	
		調整残差	-2.73**	1.33	0.87	-1.21	0.39	
r (女子)	純両価群	実際度数	9	2	2▲	1	—	$\chi^2(3)=7.36, .05<p<.10$
		調整残差	0.17	-1.59	1.98*	1.38		
	純安定群	実際度数	16	10	0▽	0	—	
		調整残差	-0.17	1.59	-1.98*	-1.38		
i (高学年男子)	純両価群	実際度数	0▽	2	1	0	—	$\chi^2(6)=14.46, p<.05$
		調整残差	-2.08**	1.37	1.72†	-0.38		
	純安定群	実際度数	13▲	3▽	1	0	—	
		調整残差	3.01**	-2.24*	-0.57	-1.49		
	純拒否群	実際度数	1	3	0	1▲	—	
		調整残差	-1.81†	1.5	-0.74	2.04*		

▲有意に多い▽有意に少ない / † $p<.10$  \* $p<.05$  \*\* $p<.01$

児童期における内的作業モデルの検討Ⅲ（井手 裕子）

表7 C C P 評定頻度の  $\chi^2$  乗検定（全体76名）

（人）

（全体）	評定名／群	度数	0	1	2	3	4	$\chi^2$
救助 c	純両価群	実際度数	1	7	8	1	0	$\chi^2(8) = 14.94, .05 < p < .10$
		調整残差	-1.63	0.97	1.13	-0.45	-1.10	
	純安定群	実際度数	8	16	16	3	4	
		調整残差	-0.76	0.59	-0.34	-0.62	1.61	
	純拒否群	実際度数	6▲	1	3	2	0	
		調整残差	2.87*	-1.89 †	-0.83	1.23	-0.89	
救助 $\Sigma$ 受容	純両価群	実際度数	0	6	9	1	1	$\chi^2(8) = 15.29, .05 < p < .10$
		調整残差	-1.49	1.11	1.70 †	-1.74 †	-0.54	
	純安定群	実際度数	4	9	17	11	6	
		調整残差	-0.27	-1.50	0.15	0.64	1.37	
	純拒否群	実際度数	3▲	4	1▽	4	0	
		調整残差	2.06*	0.73	-2.15*	1.14	-1.20	
救助 $\Sigma$ 拒否	純両価群	実際度数	1	1▽	10▲	5	0	$\chi^2(8) = 15.59, p < .05$
		調整残差	-0.53	-2.07*	2.59**	0.33	-1.24	
	純安定群	実際度数	6	14	14	10	3	
		調整残差	1.37	1.23	-0.73	-1.27	-0.09	
	純拒否群	実際度数	0	4	1▽	5	2	
		調整残差	-1.2	0.73	-1.97*	1.32	1.54	
親和 c	純両価群	実際度数	3	5	9▲	0	-	$\chi^2(6) = 10.72, .05 < p < .10$
		調整残差	-0.79	-1.56	3.02**	-0.95	-	
	純安定群	実際度数	12	24	8▽	3	-	
		調整残差	0.14	1.12	-2.05*	1.39	-	
	純拒否群	実際度数	4	6	2	0	-	
		調整残差	0.73	0.30	-0.73	-0.77	-	
親和 i	純両価群	実際度数	13▽	4▲	-	-	-	$\chi^2(2) = 4.67, .05 < p < .10$
		調整残差	-1.98*	1.98*	-	-	-	
	純安定群	実際度数	43	4	-	-	-	
		調整残差	0.73	-0.73	-	-	-	
	純拒否群	実際度数	12	0	-	-	-	
		調整残差	1.30	-1.30	-	-	-	
独立 d	純両価群	実際度数	2	6	9▲	0	-	$\chi^2(6) = 11.75, .05 < p < .10$
		調整残差	-1.07	-0.77	2.00*	-0.77	-	
	純安定群	実際度数	8	22	15	2	-	
		調整残差	-0.98	0.76	-0.23	1.13	-	
	純拒否群	実際度数	6▲	5	1▽	0	-	
		調整残差	2.68**	-0.13	-1.97*	-0.62	-	
独立 r	純両価群	実際度数	13	4	-	0	-	$\chi^2(4) = 9.23, .05 < p < .10$
		調整残差	-0.99	1.20	-	-0.54	-	
	純安定群	実際度数	43▲	4	-	0	-	
		調整残差	2.22*	-1.88 †	-	-1.28	-	
	純拒否群	実際度数	8	3	-	1▲	-	
		調整残差	-1.82 †	1.13	-	2.33*	-	
独立 i	純両価群	実際度数	14	3	0	-	-	$\chi^2(4) = 8.43, .05 < p < .10$
		調整残差	-0.07	0.24	-0.54	-	-	
	純安定群	実際度数	42	4▽	1	-	-	
		調整残差	1.91 †	-2.22*	0.79	-	-	
	純拒否群	実際度数	7▽	5▲	0	-	-	
		調整残差	-2.46*	2.68**	-0.44 †	-	-	
独立 $\Sigma$ 拒否	純両価群	実際度数	1	4	9	3	0	$\chi^2(8) = 15.74, p < .05$
		調整残差	-0.54	-1.76 †	1.70 †	0.84	-0.54	
	純安定群	実際度数	5	20	18	4	0	
		調整残差	0.55	0.10	0.64	-1.14	-1.28	
	純拒否群	実際度数	1	8	0▽	2	1▲	
		調整残差	-0.11	1.88 †	-2.80**	0.56	2.33*	

(低学年男子)	評定名/群/頻度	0	1	2	3	4		
独立 d	純安定群	実際度数	0	2	2▲	—	—	$x^2(2)=5.81, .05 < p < .10$
		調整残差	-1.90 †	0.23	2.07*			
	純拒否群	実際度数	4	3	0▽	—	—	
		調整残差	1.90 †	-0.23	-2.07*			
(低学年女子)	評定名/群/頻度	0	1	2	3	4		
親和Σ拒否	純両価群	実際度数	2▲	0	0	—	—	$x^2(2)=9.91, p < .01$
		調整残差						
	純安定群	実際度数	1	9	4	—	—	
		調整残差						
親和Σ受容	純両価群	実際度数	—	—	0	0	2▲	$x^2(2)=9.91, p < .01$
		調整残差						
	純安定群	実際度数	—	—	4	9	1▽	
		調整残差						

▲有意に多い▽有意に少ない / †p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01

独立 d ( $x^2(6)=11.75, .10 < p < .05$ ), 独立 r ( $x^2(4)=9.23, .10 < p < .05$ ), 独立 i ( $x^2(4)=8.43, .10 < p < .05$ ) であった (表7)。

残差分析の結果, 「救助」場面において, 救助 c は, 度数 0 で純拒否群が多く, 救助Σ受容は, 度数 0 で純拒否群が多く, 度数 2 で純拒否群が少なかった。救助Σ拒否では度数 1, 2 で純両価群が多く, 度数 2 で純拒否群が少なかった。純拒否群は救助場面で受容的にされない反応が多く, 純両価群は受容(傾向)と拒否の反応が多い。

「親和」場面において, 親和 c は, 度数 2 で純両価群が純安定群に比して多く, 親和 i は, 度数 0 で純両価群が少なく, 度数 1 で純両価群が多かった。

「独立」場面において, 独立 d は, 度数 0 で純拒否群が多く, 度数 2 で純両価群が多く, 純拒否群が少なかった。独立 r は, 度数 0 で純安定群が多く, 度数 3 で純拒否群が多かった。独立 i は, 度数 0 で純拒否群が少なく, 度数 1 で純拒否群が多く, 純安定群が少なかった。独立Σ拒否は, 度数 4 で純拒否群が多かった。「独立」場面では, 純安定群は拒否される反応が少なく, 純両価群は拒否される反応が多い。

さらに詳しく検討するため, 高学年と低学年, 性別, 学年性別ごとの  $x^2$  検定を行った結果を以下に記述する。

「救助」場面において有意な人数偏りが示されたのは, 高学年において救助 c ( $x^2(8)=18.36, p < .05$ ), 救助 d ( $x^2(6)=11.10, .05 < p < .10$ ), 救助 r ( $x^2(4)=10.21, p < .05$ ), 救助Σ受容 ( $x^2(8)=14.13, .05 < p < .10$ ), 救助Σ拒否 ( $x^2(8)=16.67, p < .05$ ) であった。残差分析の結果, 救助 c は, 度数 0 で純拒否群が多く, 度数 2 で純両価群が多かった。救助 d は, 度数 1 で純安定群が多く, 度数 2 で純両価群が多かった。救助 r は, 純拒否群が度数 0 で少なく, 度数 1 で多かった。救助Σ受容は, 度数 0 で純拒否群が多く, 度数 3 で純両価群が少なかった。救助Σ拒否は, 度数 1 で純安定群が多く, 純両価群が少なかったが, 度数 2 で純両価群が多かった。

また, 男子において, 救助 i ( $x^2(4)=8.28, .05 < p < .10$ ) で人数偏りが示された。残差分析では純両価群が, 度数 0 で少なく, 度数 1 で多かった。

さらに, 高学年男子において救助 c ( $x^2(6)=11.17, .05 < p < .10$ ), 救助 d ( $x^2(6)=13.67, p < .05$ ), 救助 r ( $x^2(4)=8.83, .05 < p < .10$ ), 救助 i ( $x^2(4)=9.07, .05 < p < .10$ ) で人数偏りがみられ, 高学年女子において救助 c ( $x^2(3)=7.37, .05 < p < .10$ ) で人数偏りが認められた。残差分析の結果, 高学年男子の救助 c は, 度数 0 で純拒否群が多かった。救助 d は, 度数 0 で純拒否群が多く, 度数 3 が多かった。



度数1は純安定群が多かった。救助 r は、度数0で純安定群が多く、度数1で純拒否群が多く純安定群は少なかった。救助 i は、度数0で純安定群が多く、度数1で純両価群が多く、また度数2で純拒否群が多かった。また、高学年女子の救助 c は、度数2で純両価群が多かった。

以上から、純安定群は救助場面で拒否されない傾向が高く、純拒否群は拒否や無視される傾向が高いことが示された。純両価群は救助 i において純安定群より反応が多く、純拒否群より少ない。

「親和」場面において人数偏りが示されたのは、低学年において親和  $\Sigma$  受容 ( $x^2(6)=11.90, .05 < p < .10$ ) と、親和  $\Sigma$  拒否 ( $x^2(6)=12.44, .05 < p < .10$ ) であった。残差分析の結果、親和  $\Sigma$  受容は、度数3で純両価群が多く、親和  $\Sigma$  拒否は、度数0で純両価群が少なかった。

女子においては、親和 c ( $x^2(3)=6.52, .05 < p < .10$ ) が示され、残差分析の結果、度数1で純安定群が純両価群に比して多く、度数2で純両価群が純安定群に比して多かった。

さらに、低学年女子において親和  $\Sigma$  受容 ( $x^2(2)=9.91, p < .01$ )、親和  $\Sigma$  拒否 ( $x^2(2)=9.91, p < .01$ )、で有意な人数偏りが認められ、残差分析の結果、親和  $\Sigma$  受容は度数4で純両価群が純安定群に比して多く、親和  $\Sigma$  拒否は度数0で純両価群が多かった。

以上から、親和場面では、低学年女子の純両価群が受容的な反応が多いことが示された。「独立」場面において有意な人数偏りが示されたのは、高学年において独立 r ( $x^2(4)=13.11, p < .05$ )、独立 i ( $x^2(2)=9.02, p < .05$ )、独立  $\Sigma$  拒否 ( $x^2(8)=16.55, p < .05$ ) であった。残差分析の結果、独立 r は、度数1で純両価群が多く、度数3で純拒否群が多かった。独

立 i は、度数0で純安定群が多く、純拒否群が少なく、度数1では逆の結果であった。独立  $\Sigma$  拒否は、度数4で純拒否群が多かった。

男子では、独立 d ( $x^2(4)=12.81, p < .05$ )、独立 i ( $x^2(2)=7.04, p < .05$ )、独立  $\Sigma$  受容 ( $x^2(8)=14.98, .05 < p < .10$ ) が人数偏りが示された。残差分析の結果、独立 d は、度数0で純安定群が少なく、純拒否群が多かった。独立 i は、度数0で純安定群が多く、純拒否群が多かった。また度数1は逆の結果であった。独立  $\Sigma$  受容は、度数1で純両価群が多く、度数2で純安定群が多く、純拒否群が少なかった。

さらに高学年男子において独立 i ( $x^2(2)=7.45, p < .05$ ) の人数偏りが有意に高く、残差分析の結果、度数0で純安定群が多く純拒否群が少なく、度数1では逆の結果であった。これらを表7に示した。

#### 4. 稀有反応の人数偏り

まず3群全体で、「救助」、「親和」、「独立」を示す場面についての反応を検討した。上記の3場面での通常反応、稀有反応、その他反応の合計の人数偏りを検討するため  $x^2$  検定を行った結果、「救助」場面と「親和」場面での反応には有意な人数の偏りは認められなかったが、「独立」場面における反応に人数の偏りが有意な傾向を示した ( $x^2(4)=8.79, .05 < p < .10$ )。その後の残差分析で、純拒否群の稀有反応 (d, r, i) が有意に多いことが示された (表8)。

表 8-1 全体と3場面の反応数の  $\chi^2$  検定

場面/群/反応		通常	稀有	その他	$\chi^2$	
全体	純両価群	実際度数	125	12	67	$\chi^2(4) = 10.23, p < .05$
		調整残差	-0.71	-1.09	1.39	
	純安定群	実際度数	371	39	154	
		調整残差	1.92 †	-1.10	-1.39	
	純拒否群	実際度数	82	19▲	43	
		調整残差	-1.75 †	2.71**	0.26	
独立(3・6・12)場面合計	純両価群	実際度数	35	2	31	$\chi^2(4) = 8.79, .05 < p < .10$
		調整残差	-1.09	-0.97	1.56	
	純安定群	実際度数	115	8	65	
		調整残差	1.77 †	-1.00	-1.34	
	純拒否群	実際度数	24	6▲	18	
		調整残差	-1.10	2.45*	0	

▲有意に多い▽有意に少ない / † p < .10 \* p < .05 \*\* p < .01

表 8-2 場面ごとの反応分類の  $\chi^2$  検定

場面/群/反応		通常	稀有	その他	$\chi^2$	
場面 6 「みないでよ」 (全体)	純両価群	実際度数	4▽	0	13▲	$\chi^2(4) = 8.31, .05 < p < .10$
		調整残差	-2.12*	-0.95	2.48*	
	純安定群	実際度数	23	2	22	
		調整残差	0.64	0.18	-0.71	
	純拒否群	実際度数	8	1	3	
		調整残差	1.56	0.85	-1.89 †	
場面 9 「おつかいにいくの めんどうくさいなあ」 (全体)	純両価群	実際度数	12	1	4	$\chi^2(4) = 8.86, .05 < p < .10$
		調整残差	0.22	-0.54	0.13	
	純安定群	実際度数	36	4	7▽	
		調整残差	1.95 †	-0.27	-1.99	
	純拒否群	実際度数	4▽	2	6▲	
		調整残差	-2.85**	0.97	2.50*	
場面12 「あそんでくるよ」 (全体)	純両価群	実際度数	14	1	2	$\chi^2(4) = 12.49, p < .05$
		調整残差	0.09	0.13	-0.19	
	純安定群	実際度数	41	0▽	6	
		調整残差	1.62	-2.62**	-0.13	
	純拒否群	実際度数	7▽	3▲	2	
		調整残差	-2.26*	3.34**	0.39	
場面 6 「みないでよ」 (高学年)	純両価群	実際度数	8	0	4▲	$\chi^2(4) = 9.00, .05 < p < .10$
		調整残差	-0.942	-1.47	2.91*	
	純安定群	実際度数	10	2	0▽	
		調整残差	0.942	1.47	-2.91*	
	純拒否群	実際度数	12	1	2	
		調整残差	0.05	0.11	-0.13	
場面12 「あそんでくるよ」 (高学年)	純両価群	実際度数	24	0▽	5	$\chi^2(4) = 12.34, p < .05$
		調整残差	0.67	-2.15*	0.71	
	純安定群	実際度数	3	2▲	0	
		調整残差	-1.15	3.33**	-0.96	
	純拒否群	実際度数	0	2▲	0	
		調整残差	-1.95	2.62**	-0.57	
場面 2 「いっしょにあそんで」 (低学年女子)	純両価群	実際度数	10	2▽	2	$\chi^2(2) = 6.86, p < .05$
		調整残差	1.95 †	-2.62**	0.57	
	純安定群	実際度数	1	0	1▲	
		調整残差	-1.71 †	-0.39	2.73**	
	純拒否群	実際度数	13	1	0▽	
		調整残差	1.71 †	0.39	-2.73**	
場面 7 「ほんかってちょうだい」 (低学年女子)	純両価群	実際度数	1	0	1▲	$\chi^2(2) = 7.51, p < .05$
		調整残差	-1.71 †	-0.39	2.73**	
	純安定群	実際度数	13	1	0▽	
		調整残差	1.71 †	0.39	-2.73**	
	純拒否群	実際度数	1	0	1▲	
		調整残差	-1.71 †	-0.39	2.73**	

児童期における内的作業モデルの検討Ⅲ（井手 裕子）

場面9 「おつかいにいくの めんどうくさいなあ」 (高学年女子)	純両価群	実際度数	8	0	4▲	$x^2(2)=6.22, p<.05$
		調整残差	-0.94	-1.47	2.19*	
	純安定群	実際度数	10	2	0▽	
		調整残差	0.94	1.47	-2.19*	
場面12 「あそんでくるよ」 (高学年男子)	純両価群	実際度数	3	0	0	$x^2(4)=10.28, p<.05$
		調整残差	1.04	-0.54	-0.81	
	純安定群	実際度数	13	0▽	4	
		調整残差	0.08	-2.15*	1.50	
	純拒否群	実際度数	3	2▲	0	
		調整残差	-0.94	2.95**	-1.09	
場面/群/反応数			0	1	2	$x^2$
独立稀有反応 (高学年男子)	純両価群	実際度数	0	3	0	$x^2(4)=9.61, p<.05$
		調整残差	0.81	-0.68	-0.38	
	純安定群	実際度数	16▲	1	0	
		調整残差	2.01*	-1.37	-1.49	
	純拒否群	実際度数	2▽	2▲	1▲	
		調整残差	-3.00**	2.15*	2.04*	

▲有意に多い▽有意に少ない / † $p<.10$  \* $p<.05$  \*\* $p<.01$

次に、12場面ごとの人数偏りを検討するため、3群全体、性別学年ごとの $x^2$ 検定をおこなった。

全体では、「独立」を示す場面6（みないでよ）（ $x^2(4)=8.31, .05<p<.10$ ）、場面9（おつかいにいくのめんどうくさいなあ）（ $x^2(4)=8.87, .05<p<.10$ ）、場面12（あそんでくるよ）（ $x^2(4)=12.49, p<.05$ ）、「独立」場面の通常反応合計（ $x^2(8)=20.07, p<.05$ ）、全場面の稀有反応合計（ $x^2(10)=19.54, p<.05$ ）において人数の偏りが認められた。その後の残差分析は以下のものであった。場面6では純両価群のその他反応が有意に多く、通常反応が有意に少なかった。場面9では純拒否群のその他反応が有意に多く、通常反応が有意に少なかった。場面12では、純拒否群の稀有反応が有意に多く、通常反応が有意に少なかった。

性別学年では、「救助」を示す場面で、場面4（勉強教えてちょうだい）（ $x^2(2)=5.30, .05<p<.10$ ）と、場面7（ほんかってちょうだい）（ $x^2(2)=7.51, p<.05$ ）で低学年女子の人数偏りが有意であった。

「親和」を示す場面では、場面2（いっしょにあそんで）の低学年（ $x^2(4)=8.22, .05<p<.10$ ）と低学年女子（ $x^2(2)=6.86,$

$p<.05$ ）で有意な人数の偏りを示し、場面8（こんなえかいてきた）の低学年（ $x^2(4)=13.36, p<.05$ ）と低学年女子（ $x^2(2)=6.86, p<.05$ ）で有意な人数の偏りが示された。

「独立」を示す場面においては、場面6（みないでよ）で前述のように3群全体と、高学年（ $x^2(4)=9.00, .05<p<.10$ ）で人数の偏りが有意な傾向を示した。場面9（おつかいにいくのめんどうくさいなあ）では前述の3群全体と、男子（ $x^2(4)=12.17, p<.05$ ）、低学年男子（ $x^2(2)=5.24, .05<p<.10$ ）、高学年女子（ $x^2(2)=6.22, p<.05$ ）で有意な傾向や有意な人数の偏りが示された。また、場面12（あそんでくるよ）では、前述した3群全体と、高学年（ $x^2(4)=12.34, p<.05$ ）、高学年男子（ $x^2(2)=10.28, p<.05$ ）において人数偏りが有意であった。さらに、独立通常反応合計で、3群全体と高学年（ $x^2(8)=17.83, p<.05$ ）において、独立稀有反応合計で高学年（ $x^2(4)=13.79, p<.05$ ）、高学年男子（ $x^2(4)=9.61, p<.05$ ）において人数偏りが有意であり、男子（ $x^2(4)=8.30, .05<p<.10$ ）で有意な傾向が示された。

全場面の稀有反応合計度数では、3群全体と、高学年（ $x^2(8)=19.92, p<.05$ ）において有意な人数の偏りが認められた。

なお、発達の様相を検討するため、学年性別ごとの残差分析を行い、結果を表8に示した。

## V. 考察

### 1. IWM群分けによる人数について

純型3群全体の比率が全体の約10%で、この3群の特徴をもつ児童の様相も、純両価群の女子が多く、純拒否群は男子のみで女子は存在しないという結果から、児童期には、IWMの3要素は未分化で、未確定の可能性があると思われる。そして、発達に影響され、男子と女子では特徴の現れ方が違うことが推測される。

これまでの井手(2004)の全体的な数値の検討で、男子は拒否型の特徴を示す avoidant 得点が女子より有意に高く、女子は両価的な特徴を示す ambivalent 得点が5年生女子は男子に比して有意に高いという結果が示され、井手(2007)の群分けにおいても拒否群の5年生男子が有意に多く、両価群は5年生女子、6年生女子で有意に多いという結果が示された。すなわち本サンプルにおいては男子は拒否の傾向、女子は両価の傾向を持つことが、共通の傾向であったといえる。一方宮本(1997)も、低学年の密着した母子関係から高学年の分離的な変化の様相と、男子のほうがより拒否傾向や分離が早いことを示したように、発達の視点と性差は、児童期のIWMを考える上で重要な視点と思われる。

拒否傾向については、男子が母親からの分離に伴う母親の意に添わない行動が増えるために、母親からの叱咤が増え、それを拒否と感じやすく、拒否的なIWMの要素を内在化しやすくなるのかもしれない。一方、両価傾向は高学年で高くなり、特に高学年女子において特徴的であったことから、これは発達の要素と関連があると思われる。氏家

(1986)は、Tajima(1984)の示した自己認識の発達が両価的な傾向を示すCタイプの子どもにおいて早いことと、自己制御機能との関連性を、Cタイプの子の抑制的傾向から捉えており、本サンプルでも純両価群の持つ抑制傾向と前思春期にさしかかる途上での不安定さが、対人対処方略においても純両価群の不安傾向として反映されていると考えられる。また神谷(1992)は、男子より早く思春期が始まる女子のほうが、親への反発心が活発となるなど独立的傾向を示すという予想に反し、女子のほうが男子より両親とのつながりが大きいという結果を示し、さらに母子関係のつながりの弱さが自立に向かうさいに親への反抗やアンビヴァレントな心理的危機を強く生じさせると述べている。このように、高学年女子は、思春期の反抗的な心性と母親との関係の不安が同時に喚起され、両価傾向が強くなるのかもしれない。

### 2. IWMの特徴について

ここでは、全体的なCCP評定と、欲求体系別場面のCCP評定の人数分布を関連付けながら、純3群の特徴を検討してゆく。

#### a. 純両価群について

純両価群は、「親和」場面でcとiの反応や「独立」場面でd反応が多く、純両価群の母親の特徴として従来言われている、一貫性のなさや矛盾した気分しだいの応答性(遠藤, 1992)が純両価群の子どもにも認識されていることが示唆された。このことは、母親から得られる反応によって情緒的な自己の安定や安全感を得られるかどうかの予測がつきにくく、親和的な関係性についての不安を生じ、その結果顔色を見たりまわりつく行動につながるのであり、そのような両価型の子どもの特徴を裏付けた。言い換えれば、井手(2007)で示された親和動機における両価群

の分離不安得点の高さも、このような矛盾する母親の反応が与えた子どもの関係性の不安が、友だちとの対人態度にも反映されていると考えられる。Koback（1988）は青年期の両価群の特徴として、友人や恋人との関係性の不安定さを記述しており、このような児童期の母親の関わり方の繰り返しによって、純両価群のIWMは親和場面で敏感に活性化され、特徴づけられるようになるのではないかと推測される。

また、「独立」を表明すると、d（厳格さと支配）反応が返ってくると認識しやすいのも、前述のように、純両価群の子どもが不安げな親子関係を示すため、母親自身も不安が喚起され、子どもの自立を促したり、子どもの不可侵や自律の表明に対して安心して任せることができず、その表明を押さえて、親の思い通りに動くことを期待する反応（支配）が多くなるのではないだろうか。

#### b. 純拒否群について

純拒否群は、「救助」場面と「独立」場面で拒否的な反応が多いことが認められた。特にi反応は純拒否群の特徴ともいえるほど、多かった。

このことは、純拒否群の子どもが、母親の拒否的な関わりを認識していることを示しており、「救助」を求めたり「独立」を表明したりすると、拒否されたり無視されるという日常生活の様子がCCP場面に反映されているといえる。特に「救助」場面は安全感と関係する、愛着に対する感受性の強い場面ともいえる。Bowlby（1973）は幼児の愛着行動は安全感が損なわれる場合に活発に働くとして述べており、Sroufe, et., al（1977）は、IWMはストレスフルな状況下での情動制御を規定するとしているように、「救助」場面は「気分が悪い」「勉強がわからない」「テストが悪かった」等のストレスフルな状況を母

親に訴える場面であるから、そのような場面では当然IWMが活発に働いているといえる。その時に母親の拒否的な関わりが日常的に繰り返されているとしたら、当然子どもに内在化され、CCPにも反映されることになるであろう。以上から、日常的な母親の関わりは、救助場面であるほど、子どものIWMを敏感に活性化させ、それが拒否的なIWMを安定させる要因の1つになるのではないかと思われる。川瀬ら（1987）においても拒否的認知が高い群は救助場面で母親から拒否されていると認知する反応が多いことが示されており、このような場面で純拒否群の子どもは、すでにIWMが活性化し機能していると推測できる。

また、これらの場面における発達的な特徴をみると、「救助c」「独立i」において高学年男子の様相が全体の様相と同様で、高学年男子の反応の様相は、青年期の3群の特徴（Koback, 1988）と同様の結果を示していることから、高学年男子はすでにIWMが安定しつつあると考えられる。

#### c. 純安定群について

a, bにおいては、いずれも母親の拒否的な反応という関係性の危機の場面で愛着が活性化され、IWMを強化していく可能性が示唆された。そして、それぞれの母親の反応の違いがタイプの違うIWMを形作ることが示された。では、純安定群はd反応との関連についてどのような意味があるのだろうか。

表6のように、CCP評定度数において低学年の純安定群はd反応が多く、純安定群の母親は、低学年において他2群に比してd反応が多いという特徴が示された。

d反応は、表3のように「欲求を受け入れずに思い通りに強力で働きかけるが、情緒的には拒否しない」という定義を持つ因子であり、厳格さや支配を子どもが認知する状態で

あるとされている。一方、情緒的に拒否しない厳格な支配とは、低学年の子どもに必要なしつけの要素を持つともいえる。評定されるのは、例えば場面1で子どもが「きぶんがわるいのです」と訴えたときに「薬を飲みなさい」と答えたり、場面3で「ひとりでやるよ」に対し「してあげる」と返答したり、場面4で「べんきょうおしえてちょうだい」と言った時に「自分でやりなさい」と返答するなどの場合である。これは、子ども側からは欲求を受容されたようには感じられないかもしれないが、場合によっては子どものために必要な返答である。

低学年は、母子関係の親密さから友だちとの親密な関係へと移行する過程だが、子どもは親の枠組みのなかで生活していく時期であるから、親の養育スタイルがそのまま子どもに抵抗なく受け入れられ、それが直接CCPへ反映されると考えられる。もしこの因子が「しつけを含む必要な支配」という要素を含むなら、低学年時の生活のなかではd反応は日常的に遭遇する自然な反応であり、幅広い分布が見られると思われる。純安定群の母親が日常的にd反応が多いというのは、しつけとしての養護性を含む方向性のある関わりが多いことを示唆し、それが純安定群のIWMをより安定させるための要素として働くと考えられる。Brethertonら(2008)が安定愛着を形成した子どもの成長につれて、親は関わりを変化させ、モデルを漸次的に変化させながらさらに安定性を増すと述べたように、その発達に適した養育行動は、適切な関係性として子どもに内在化されると思われる。

一方、低学年男子の純安定群は「独立」場面でもd反応が多かった。低学年男子は独立への萌芽の時期でもある。子どもが独立や自立にむけて発達するときには、「独立」場面での母親からのd的な関わりは、自立的に動

こうとする子どもの行動を制御、統制する動きに受け止めやすく、支配や厳格さとして否定的な要素を持つようになる。純安定群がもし独立への準備が開始されているのであれば、同時にd反応の支配感を感じ取り見極める能力も発達しつつあるとも考えられ、それゆえ純安定群のどの子どももd反応を認識し、分布が広範囲にわたっているとも考えられる。

安彦(2006)は、子どもの自立性の高さは親との心理的距離の近さと関連するとしているように、本研究でも純安定群が親との心理的距離の近さと対応していると考えられ、自立性が高いと推測される。一方尾崎ら(2008)が示した、就学前の愛着安定が高い子どもの協調性、仲間参加がよいという社会的コンピテンスの高さも、自立性の喚起と関連があると思われ、d反応は、低学年時には養護的に働き、高学年時には「独立」を支配的に統制していくものとして変化している可能性がある。

#### d. d反応の分類評定について

最後に、d反応の分類評定について、以上の知見から述べたい。

前述したように、d反応は「欲求を受け入れず強力で働きかける」部分と「情緒的に拒否しない」という側面を持つ。欲求を受け入れないということでは拒否反応と分類される要因となるが、低学年では、母親からのしつけに関する支配感を否定的に自覚するのは時期尚早で、子どもはこれらの反応を否定的で支配的と受け止められるかどうかは疑問である。CCPの反応のみからは、子どもがd反応を支配的と受け止めているかどうか、支配的な感じを否定的に受け止めるかどうかはうかがい知ることができないため、内容吟味の分析と共に、その反応をどう受け止めているかというもう一步深い検討が必要である。

以上のように、d反応はCCP評定におい

て拒否反応に分類されるが、低学年の時期に合わせた養護性と指導性をかねた適切な反応の要素を持ち、rやiの拒否感と区別して考える必要があると思われる。

### 3. 稀有反応における3群の特徴

以上、純型3群の特徴についてまとめて触れたが、それを具体的な反応の差異として以下に示す。

表8のように、純拒否群は、全体と独立場面で、稀有反応が有意に多いことが示され、純拒否群（本研究では男子のみ）の子どもは、「あそんでくるよ」と述べると、例えば「ちょっと待ちなさい」、「勉強してから」のようなd反応、「だめ」等否定的な言葉をかけるr、「勝手にしなさい」や黙っているi等の反応を示されると認識している。反対に、純安定群ではこれらの場面で稀有反応は少なく、「気をつけて」、「早く帰ってきなさい」等c反応（通常反応）が多いという結果から、純安定群は独立を承認され、純拒否群は否定される特徴があることが、稀有反応からも裏付けられた。

純両価群は稀有反応はむしろ純安定群より少なく、その他反応をされると認識している。例えば場面6（みないでよ）で、純両価群は通常反応（c, s）が少なく、その他反応dを返されると認識している。d反応については前節でも述べた通り、「救助」場面においてはしつけや適切な養育行動としての要素を持つが、「独立」場面では本来の定義である厳格さや支配の要素を持つ反応となり、純両価群の母親は、子どもが不可侵や自律を表明したことに対してそれを押えて、親の思い通りに動くことを期待する反応（支配）が多いことが示唆される。この場合、親との友好的な関係を維持するなら、子どもは自発性を抑えて親に従わざるを得なくなる。

前述の氏家（1986）が、抑制機能が過剰に働くc（両価的な）タイプの子どもは、大人の命令、要求に従順であると同時にovercontrol傾向があり、それは制約されやすく、ストレスを抱えやすいと述べた。また、松村（1998）は、青年期の研究でambivalentなIWMと思春期の母の干渉、および母への反発との正の相関を認め、母親との関係の不安定さが特徴的であるとしている。この時期の発達の状況である母親からの分離傾向に対して、純両価群の母親は干渉を通してむしろ逆方向を承認する傾向があり、それが高学年になるにつれ、子どもの反発も招きやすく、不安定な関係へ移行する可能性もある。このような関係性が、両価群の対人的な分離不安（井手，2004）や青年期の対人不安（松村，1998・Koback，1988）、自発性や自立性を発揮できず押さえ込まれた怒りからくる両価的な側面を形成する要因となると考えられ、その他反応の多さからも前節の純両価群の特徴を裏付けた。

## VI. まとめと今後の課題

児童期におけるIWMの個人特性を検討した結果、純型を示す3群の割合は全体の約10%で、純型3群も、高学年では純両価群の女子が多く、純拒否群は男子のみで女子は存在しなかった。

IWMとCCPの関係を検討した結果、純両価群は親和c、親和i、独立dが多く、純安定群は低学年でd反応が、純拒否群は、i、独立r、独立iが多かったことから、純両価群は母親との親和に関して両価的であり、純拒否群は拒否、無視される日常、純安定群は拒否されることが少なく、低学年での養護性と支配性が特徴的であった。いずれの特徴も、青年期の3群の特徴を予測するものであった。

本研究は、児童のIWM特性を質問紙によっ

て検討したものであるが、今後は更に児童期全体の検討を深めるため、IWMの質や構造についての発達の様相を明らかにすることが課題となる。そのため、尺度の再検討、および半構造面接や継続的な縦断研究等の方法を開発し、児童期における研究の質を高めることが望まれる。

特に、児童期の発達課題である、独立性(自立性)とIWMとの関連やそれを阻止する養育環境の要因がIWMの3つの群の特徴を強化しているとも考えられるため、検討する必要があると思われる。また、CCPにおける母親の支配性dをどのように認識しているのかについて、半構造面接等によって検討することで、IWMと母親からの独立分離の時期との関係についても明らかになるのではないと思われる。いずれにしても、児童期のIWMの研究は、発達の流れのなかでの特徴を検討することが必要であり、方法論の開発が望まれる。

#### [付記]

本論文は、1998年度金城学院大学大学院人間生活学研究科修士論文の一部を、加筆修正したものである。

本論文作成にあたり、貴重なご助言ならびにご指導をいただきました金城学院大学内藤徹名誉教授をはじめ、川瀬正裕教授、松本真理子教授、学会でご意見ご指導を頂戴しました松田惺名誉教授、幾多のご指導を賜りました諸先生・諸先輩方に、心より感謝申し上げます。

また、調査を快くお引き受け下さいました各小学校の校長先生・先生方・児童・保護者の皆様などご関係者に、末筆ながらこの場をお借りして、心より厚くお礼申し上げます。

#### 参考文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978): Patterns of Attachment A psychological study of the strange situation Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bowlby, J. 黒田実郎・大羽奏・岡田洋子・黒田聖一(訳)(1991): 母子関係の理論Ⅰ 愛着行動 岩崎学術出版社
- [Bowlby, J. (1969): Attachment and Loss, vol.1 Attachment. London: Hogarth]
- Bowlby, J. 黒田実郎・大羽奏・岡田洋子・黒田聖一(訳)(1982): 母子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版社
- [Bowlby, J. (1973): Attachment and Loss, vol.2 Separation Anxiety and Anger. London: Hogarth]
- Bowlby, J. 黒田実郎・大羽奏・岡田洋子・黒田聖一(訳)(1981): 母子関係の理論Ⅲ 愛情喪失 岩崎学術出版社
- [Bowlby, J. (1980): Attachment and Loss, vol.3 Loss: Sadness and Grief. London: Hogarth]
- Bretherton, I and Munholland, K A (2008): Internal Working Models in Attachment Relationships: Elaborating a Central Construct in Attachment Theory. Handbook of ATTACHMENT Second Edition (pp.102-127) The Guilford Press.
- Cassidy, J. (1988): Attachment and the self in six-year-olds. Child Development, 59, 121-134.
- 遠藤利彦(1992a): 愛着と表象-愛着研究の最近の動向-内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観 心理学評論, 35, 201-233.
- 遠藤利彦(1992b): 内的作業モデルと愛着の世代間伝達 東京大学教育学部紀要, 32, 203-220.
- 遠藤利彦・江上由実子・鈴木さゆり(1991): 母親の養育意識・養育行動の規定因に関する探索的研究 東京大学教育学部紀要, 31, 131-152.
- 遠藤利彦(企画者)・菅原ますみ(司会者)・数井みゆき・園田菜摘・小林隆児(話題提供者) 1998 関係性を通して見る子どもの社会情緒的発達 日本発達心理学会第9回大会 発表論文集, s20 (抄録).
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987): Romanti



- c Love Conceptualized as an Attachment Process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 林勝造・一谷彊・小嶋秀夫（1987）：親に対する子どもの認知像の検査法－CCP解説1987年第4改訂版－大成出版牧野書房
- 古屋敬子（2002）：外界および自己についての情報処理に関する一考察－内的ワーキングモデルの観点から－京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 494-506.
- 井手裕子（2004）：児童期における内的作業モデルの検討－発達の側面を中心に－金城学院大学心理臨床相談室紀要, 4, 3-11.
- 井手裕子（2007）：児童期における内的作業モデルの検討Ⅱ－親和動機との関連性－金城学院大学論集 人文科学編, Vol.3, No.2, 106-119.
- 神谷ゆかり（1992）：児童期における親子関係と独立性との関係 安田女子大学紀要 20, 73-84.
- 川瀬正裕・小嶋明子・斎藤蔄・会沢勲・荒尾紀子（1987）：受諾－拒否表現行動に及ぼす母子関係の影響(2) 日本心理学会大会発表論文集第29回, 340-341.
- Kobak, R.R., & Sceery, A. (1988) : Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation and representations of self and others. *Child Development*, 59, 135-146.
- 久保田まり（1997）：アタッチメントの研究：内的作業モデルの形成と発達 川島書店
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985) : Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of representation. *Growing Point of Attachment Theory and Research, Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50 (1-2, Serial No.209.), 66-102.
- 松村和恵・青柳肇（1998）：ヒューマンサイエンス, 10(2), 86-98
- 宮本邦雄（1997）：児童における内的作業モデルと母子関係 東海女子大学紀要, 17, 181-197.
- 中里至正（2006）：子どもの自立を妨げる社会的要因 児童心理 No.842 29-34
- 尾崎康子・吉沢あゆみ（2008）：幼児期における愛着と社会的コンピテンスとの関連-ドールプレイ法からの検討－人間発達科学部紀要 第2集第2号, 163-174
- Sroufe, L.A & Waters, E. (1977): Attachment as an organizational construct. *Child Development*, 48, 1184-1199
- 詫摩武俊・戸田弘二（1988）：愛着理論からみた青年期の対人態度-成人版愛着スタイル尺度成の試み－東京都立大学人文学報, 196, 1-15.
- Tajima, N. (1984) : Infant's temperamental disposition, attachment, and self-recognition in the first 20 months of life. *Annual Report 1982-1983, Research and Clinical Center for Child Development, Faculty of Education, Hokkaido University*, 6, 71-80.
- 氏家達夫（1986）：行動の自己制御機能の発達と愛着との関係について 国立音楽大学研究紀要, 21, 39-45